ホセ・リサール

ノリ・メ・タンヘレ

Noli Me Tangere

－わが祖国に捧げる－

岩崎　玄訳

フィリピン双書 1

井村文化事業社 発行
勁草書房発売

„Was? Es dürfte kein Cäsar auf euren Bühnen
sich zeigen? — Kein Achill, kein Oren,
keine Andromacha mehr?"

Nichts! Man sieht bei uns nur Pfarrer,
Commerzienräthe, — Fähndriche, Secretärs
oder Husarenmajors.

„Aber, ich bitte dich, Freund, was kann denn
dieser Misere — Großes begegnen, was kann
Großes denn durch sie geschehn?"

„Que! No podria un César presentarse
En vuestras tablas, no mas un Aquiles,
Un Orestes ó Andrómaca mostrarse?"

Quia! Si no vemos mas que corce les,
Curas, alféreces y secretarios,
De husares comandantes y alguaciles.

'Mas, di, que pueden estos perdularios
Hacer de grande? Pueden tales ratas
Dar lugar á hechos extraordinarios?"

Schiller La sombra de Shakespeare

BERLIN.

Berliner Buchdruckerei-Actien-Gesellschaft

Setzerinnen Schule des Lette-Vereins

訳者略歴

岩崎玄（いわさき　げん）

1910年　東京に生れる　1934年　慶応義塾大学卒業
1948年　シンガポールから復員し，日本語教師になる．
　　外国語教授法，諸外国語の研究に専念する．
1960年　フィリピン大学客員教授．
1961年　リサール騎士団の騎士に叙任され，Knight Commander of Rizal 勲章を受ける．
1964年　帰国．
　　国際学友会日本語学校，早稲田大学，東京工業大学などで留学生の日本語教育に従事．
1972年　デリー大学客員教授．
1975年　帰国．
　　現在　リサールの著作の翻訳に専念中．
訳書　『パーキンソン夫人の法則』等数点

ノリ・メ・タンヘレ
—わが祖国に捧げる—　＜フィリピン双書1＞

1976年1月31日　第1刷発行

著者　ホセ・リサール
訳者　岩崎玄

発行所　株式会社　井村文化事業社
東京都渋谷区道玄坂2—16—3

発売所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽2—23—15
振替東京 5—175253

落丁・乱丁本はおとりかえします．
©1976　Gen Iwasaki
＊定価はカバーに表示してあります．

製版　清水印刷
印刷　港北出版印刷
製本　谷島製本

0097—997000—1836

目次

わが祖国に（序）　1
一　パーティ　2
二　クリソストモ・イバルラ　13
三　晩食　16
四　異端者とフィリブステロ　20
五　やみ夜のひとつ星　26
六　カピタン・チャゴ　28
七　露台の清純な恋　38
八　思い出　45
九　この国のくさぐさのこと　49
十　町　53
十一　支配者たち　56
十二　万聖節　60
十三　あらしの前ぶれ　64
十四　哲学者、または気ちがいタシオ　67
十五　侍祭たち　75
十六　シーサ　79
十七　バシリョ　83

十八　苦悩する魂　87
十九　小学校教師の冒険　93
二十　町役場での集まり　102
二十一　ある母親の物語　112
二十二　光と影　118
二十三　魚とり　121
二十四　森の中で　132
二十五　哲学者の家で　143
二十六　祭礼の前夜　153
二十七　たそがれどき　159
二十八　通信　166
二十九　朝　171
三十　教会で　175
三十一　説教　179
三十二　起重機　187
三十三　自由思想　195
三十四　食事　198
三十五　とりざた　207
三十六　最初の雲　213
三十七　閣下　216
三十八　行列　223

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

三十九　ドニャ・コンソラシオン　227
四十　権利と権力　236
四十一　二つの訪問　243
四十二　デ・エスパダニャ夫妻　245
四十三　たくらみ　255
四十四　良心のためし　258
四十五　追われる者　263
四十六　闘鶏場　268
四十七　ふたりの夫人　276
四十八　なぞ　281
四十九　迫害された者の声　283
五十　エリアスの家族　292
五十一　変化　298
五十二　死者と影のカード　301
五十三　IL BUON DI SI CONOSCE DA MATTINA　305
〔天気のいい日は朝からわかる〕
五十四　陰謀　310
五十五　破局　315
五十六　人の口と思わく　320
五十七　VAE VICTIS!　325
〔やぶれた者にわざわいあれ〕

五十八　のろわれた者　332
五十九　国家と利害関係　335
六十　マリア・クララの結婚　344
六十一　湖中の捕り物　354
六十二　ダーマソ神父の説明　360
六十三　クリスマス・イブ　363
むすび　370
訳者註　375
解説　岩崎玄　413

わが祖国に

人類の病気の歴史に、ひとつのがんが記録されている。それはきわめて悪性のものであって、ちょっとでもそれに触れると、その刺激が、はなはだしく鋭い痛みを与える。さて、わたしが近代文明のただなかにあって、あるいはおまえの思い出にふけろうと思い、または他の国々と比較しようと思って、なんどおまえの姿を思い起こそうとしたことだろう。しかしそのたびごとにわたしの前にあらわれたなつかしいおまえは、いつもこれと同じような社会的ながんに苦しんでいる姿で目の前に現れるのだった。

わたしたちのものであるおまえの健康をこい願うがゆえに、また最善の治療法をさがしもとめるために、わたしはおまえの病気に対して、古代人のやったやり方を、おまえといっしょにやろうと思う。つまり、神に祈りに来る人々が、その療法を教えてくれるように、病気を神殿の階段にさらけ出すのである。

そこでこの目的のために、おまえの現状を、なんの手かげんもせずに、忠実にここに描き出してみようと思う。わたしは真実のためにはすべてを、自尊心でさえ犠牲にして、この病をおおうベールをもちあげることにしよう。なぜなら、わたしもまたおまえの子として、おまえの欠点と弱点とのために苦しまなければならないからである。

ヨーロッパ、一八八六年　　著者

一

パーティ

十月末のある日、カピタン・チャゴという名でひとによく知られているドン・サンチャゴ・デ・ロス・サントスが、晩さん会を催した。かれのいつものやり方とはちがって、この会の通知は、当日の昼すぎになってやっと出されたのだったが、これがビノンドやその他の地区、はてはイントラムーロス*にいたるまでのあちらこちらの話題を、すっかりさらってしまった。カピタン・チャゴは、そのころ、もっとも気前のいい人だとみなされていて、その住まいが、かれの国家と同じように、取り引きと新思想あるいは大胆な思想のほかには、どんな人に対しても閉ざされていないことはよく知られた事実だった。

神が無限の慈悲をもって創造したまい、深い愛情をもってマニラにはびこらせられた寄食家や、はいや、やじ馬といった手合の間に、まるで強い電撃のようにこの知らせがひろまった。くつ墨をさがし出すやつがあるかと思えば、ボタンやネクタイをさがし出すやつもある。とにかくすべての者が、その家の主人に、むかしの友情を思い起こさせるために、いかにも親しげなあいさつをするにはどうしたらいいか、またなぜもっと早くかけつけることができなかったか、というようないいわけをどんなふうにしたらいいか、そんなことを夢中で考えていた。

この晩さん会は、アンロアゲ街*にある家でおこなわれた。今ではこの家の番号を思いだすことができないから、地震がつぶしてしまわなかったかぎりは、今でもその家をみつけだすことができるはずだ、とでも書いておくことにしよう。その家の主人がそれをこわさせてしまったとは思えない。というのは、こういった仕事は、ふつうは、わが国の政府からたくさん詰け負い仕事を引き受けている神、または自然がしょいこむことになっているからである――この家は、この国の多くの建物と同じような型の、かなり大きな建物で、パシグ川の支流のひとつにのぞんだ地区に建ててあった。この支流というのは、ビノンド川ともよばれている川で、マニラのすべての川と同じように、水浴場、下水みぞ、洗たく場、魚つり場、運輸交通の手段といったようなたくさんの役割りをはたすものであって、はては中国人の水売り人が好都合だと考えれば、飲料水にまでなるのである。ところで注意すべきことは、交通がしげく往来のこみあっているこの地区の大動脈に、ほとんど長さ一キロにわたって、木造の橋がたったひとつしかないということである。その橋も六か月間は片側がこわれていて、あとの半年はもうかた一方が通行止めになるというしまつで、そこで暑い時期には、これがいつになってもよくならない状態につけこんで、そこから馬が水の中におりこむ。そ

うすると、馬車の中でうつらうつらと居眠っていたり、あるいはこの世紀の進歩について哲学的黙想に心をうばわれたりしている人間を、ひどくびっくりさせるというしだいなのである。

ところで、この話の家は、背がいく分低めで、それを構成する線がまっすぐだとは言いかねる。これをたてた建築家の目が狂っていたのか、あるいは地震か台風のしわざなのか、それはだれにも、わからない。かざり板石を敷いた正面入口から、みどり色の手すりをつけ、間をおいてじゅうたんを敷いた幅の広い階段が、色どりのゴタゴタした奇妙な模様の瀬戸の平石にのせた植木と花のはちの間をとおって、おも屋までつづいている。

読者よ！　あなたがわたしの味方であろうが敵であろうが、オーケストラの楽音や、あかりや、食器とナイフとフォークのさも意味ありげなチャリンチャリンという音などにひきつけられ、この「東洋の真珠*」で催される集まりがどんな様子か見てみたいとお思いなら、べつに招待状を見せてくれと言ったり、とがめだてしたりする門番も召使いもいるわけではないのだから、ひとつ上へ上って見ることにしようではないか。家のことをくだくだと述べたてて読者をなやませないですませられれば、わたしもありがたいし、楽でもあるのだが、じつはこれはたいへん大切な事なのだ。というのは、われわれ人間どもは概して亀のようなもので、われわれのせおっている亀の甲で値段がきまり、格付けがおこなわれるものなのだからである。この性質、およびその他いろいろの性格のせいで、フィリピンの人間どもは、よほど亀に近いのである。――さて上にあがってみると、いきなり広い部屋にでっくわす。この部屋は、どういうわけかわからないのだが、この家ではカイーダ*とよばれていて、これが今夜は食堂にもなれば、同時にオーケストラを演奏する広間にもなるのである。そのなかほどには、仰々しくぜいたくな飾りつけをした長テーブルがある。それはやじ馬連には、おいしいごちそうを約束する合図のようにも見えるし、また内気な娘、世なれないお嬢さんたちに対しては、ひどく変った言い回しやおしゃべりをする見も知らない人たちと、これから死ぬほどつらい二時間も同席しなければならないのだぞと、脅迫しているようでもある。ところが、こういう俗世的な準備とはうってかわって、壁にはゴタゴタした色の額がいくつかかかっていて、それには「練獄」とか「地獄」とか「さいごの審判」とか「正義者の死」とか「罪びとの死」とかいう宗教的なできごとがえがいてある。またへやの奥には、アレーバロの手ぼりになるルネサンスふうのピカピカの優雅な額ぶちの中に、ふたりの老婆のえがいてある大きな奇妙な絵が入れてあって、それにはこんな題辞がある。「アンティポロ*にまつられる平和と旅行安全の聖母が女こじきの姿をなさって、病気になった敬けんで高名なカピタナ・イネスをおとずれたまう図」。この絵は趣味や芸術性はあらわしてい

ないかわりに、ものすごく写実的にえがいてある。病気の老婆は、その顔色が黄と青の絵の具で塗ってあるために、くさりかけた死体のように見える。老婆の長い病いの道づれとなったコップやその他の品物は、そのなかみが見えるほどこまかに描いてある。食欲をそそり、牧歌的な思いをかきたてるこれらの額をながめていると、悪知恵のあるこの家の主人が、この食卓につく人たちの大部分の性格をまことによくこころえていて、しかもその魂胆をいささかおおいかくすために、天井から高価な中国のランプだとか、鳥のいない鳥かごだとか、赤・緑・青のくもりガラスの玉だとか、しおれた気生植物だとか、ボテーテ* とよばれる乾かしてふくらました魚だとか、そういったものをぶらさげたのだな、と気のつく人がいるかもしれない。それらはみんな川とは反対側の奥の壁を飾っているのだが、川に開いた面にはなかば中国風の、またなかばヨーロッパ風の、木造の風変りなアーチがあって、そのさきの露台には、ありとあらゆる色の紙のちょうちんでぼんやり照らしだされた植木だなと、あずまやとが見えるようになっている。

広間には、ばかでかい鏡と、みごとなシャンデリアのあいだに、これから食事をしようとする人たちがいる。また松の板ではった台の上には、堂々たるグランドピアノが飾ってある。これはたいへんな値段のものなのだが、今夜はそれを演奏する者がだれもいないものだから、なおいっそう値がはって見える。そこにはまた大きな油絵の肖像がひとつある。その絵の主はえんび服を着たりっぱな男で、指輪をたくさんはめたこわばった指で握っている房つきのつえ* のように、しゃちこばり、真正面をむいてつっ立っている。その肖像は、こんなことを言っているようだ。

「エヘン！　見たまえ、なんと我が輩はみごとな衣装をつけて、りっぱなものであろうがの！」

家具はみんなりっぱで、かえって不便で、不健康ではあるまいか* と思われるほどである。だが、この家の主人は、まねかれた客の健康などより、ただ自分のぜいたくしか考えていないのではなかろうか。「せきりというやつはおそろしいやつじゃ。だがきみたちはヨーロッパ製のひじ掛けいすにおさまっている。こんなことは、毎日できることじゃあるまいが！」主人はそんなふうに言いたそうだ。

広間はほとんど人でいっぱいである。男どもは、カトリック教会やユダヤ教会でのように、婦人たちとは別々にかたまっている。婦人たちはフィリピン人と、スペイン人の若いむすめたちである。かの女たちは、あくびを抑えようとして口をあけるが、すぐに扇でその口もとをかくしてしまう。小声で話すことさえほとんどしない。たまに何か話しだそうとしても、それは一音節だけで消えてしまう。ねずみかやもりが、夜、家の中でたてるような、そんな音だった。壁にさがっているもろもろの聖母の像がかの女たちを強制して、沈黙と信心ぶかそうなおすましをまもらせているのであろうか。それともここにお集りの婦人がたは、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

例外なのであろうか？

婦人がたの接待をしているたったひとりの人は、カピタン・チャゴのいとこで、人のいい顔つきの、何ともへたくそなスペイン語をしゃべる老婦人であった。ところがこの人のおもてなしといえば、ただスペイン人の婦人がたには葉巻とブヨ*をのせたおぼんをすすめること、フィリピン人の婦人がたに対しては、修道会士がやらせることをそのままに、手を与えて口づけをさせることだけだった。この気の毒な老婦人は、とうとうそれにあきあきして、おさらのこわれた音をきっかけに、こんなことをつぶやきながら、アタフタと退場した。

「まあまあ！　ちょっとお待ちなさい、しょうのない人たちだねえ！」

そして二度と姿をあらわさなかった。

ところで、殿方のほうはというとこれはずっと騒々しかった。一方のすみでは、数人の士官候補生が、声は低いがげんきに話しあい、ときどきこの広間にいる人たちのほうをながめ、またしばしば人々を指でさししめし、そして自分たちだけでひっそりと笑いあっていた。ところがこれとは反対に、白い服を着たふたりの外国人が、両手をうしろにくみ、ひとこともしゃべらずに、船の甲板でたいくつした乗客がやるように、広間の一方のすみから他方のすみへと大またに歩き回っていた。おもしろそうなふん囲気と、大きな活気とは、ぶどう酒のびんとイギリス製ビスケットのおいてある小テーブルのまわりにすわっているふたりの聖職者、ふたりの民間人、ひとりの軍人からなっているグループから起こっていた。

この軍人は、背の高い、いかつい顔をした老中尉で、自衛隊*の勤務名簿のしりっぽにやっとしがみついているアルバ公爵*といった様子だった。かれはほとんどしゃべらないが、しゃべる時にはきびしく、そして簡潔だった。修道会士のうちのひとりは、ドミニコ会の青年で、顔かたちは整い、かれがかけている金象眼の目がねのように優美で、光りかがやいていて、年に似合わぬ荘重さを持っていた。かれはビノンドの主任司祭で、前身はサン・ホワン・デ・レトラン*の教授であった。完全無欠な弁論家であるという名声が高く、まだグスマンのむすこたち*が、討論の巧妙さでは、修道会に属さない僧職者とどっこいどっこいだった当時でさえ、あの老練な弁論家であるB・デ・ルーナをもってしても、かれを混乱させたり取りおさえたりすることはけっしてできなかった、というくらいのものなのである。シビーラ師の事わけは、B・デ・ルーナを、まるでなわでうなぎをつかまえようとする漁者のような目にあわせたものだった。このドミニコ会修道士は、口かずが少なく、自分のことばをひとつひとつ慎重に考えているようだった。

これに対して、もうひとりのほうは、フランシスコ会の修道会士で、口かずが多く、手ぶり身ぶりはさらに多かっ

た。かれの頭髪は白くなりかけているにもかかわらず、がん健な体質を保っているらしかった。かれの端正な日鼻だち、あまりおちつきのないまなざし、幅の広いあご骨、そしてヘラクレスのようなからだつきは、仮装のローマ貴族のような外観をかれに与え、読者に思わず、ハイネが「追放された神々」のなかで語っている三人の僧、すなわち毎年九月は秋分の真夜中にチロル地方の湖を小舟でわたり、そのたびに貧しい船頭に、氷のようにつめたい銀貨を与えてかれをびっくりさせるという、あの三人の僧のひとりを思い出させることだろう。だが、ダーマソ師はその僧たちほど神秘的ではない。かれは快活で、その声は、自分は言いたいことはけっしてかくさない、そして自分のいうことはすべて神聖で最善である、と思いこんでいるように響く。とはいうものの、かれの快活なあけっぱなしの笑いは、こんないやな印象はぬぐい去ってしまい、ついにはキャボ市場のメンディエータ* になったらひと財産つくったろうと思われるような人がらで、くつ下をはかない足や毛深いすねを広間にさらけ出したところで、それを許してやらねばならないような気に人をさせるのだった。

民間人のひとりは、背が低く、ひげのこい男だが、鼻だけがその特徴で、大きさだけから判断すれば、とてもこの男の持ちものとは思えないような鼻を持っていた。もうひとりは金髪の青年で、つい最近この国へ来た様子だった。この男をつかまえて、フランシスコ会修道士が、威勢のいい議論をやっていた。

「いまにわかりますじゃ。この国になんか月かおいでになれば、わしのいうことがのみこめましょうて。つまりマドリッドで統治することと、フィリピンで生活することとは別のことだということが。」

「しかし…」

「たとえばですよ。」ダーマソ師は、相手にしゃべらせないように、いっそう声をはりあげて続けた。「わしはバナナと米の飯を食うこと二十三年になりますからのう。これについては権威をもってお話しすることができますのじゃ。理論や修辞学でわしにかかってこようったって、それはだめじゃ。わしは土人を知っていますからな。いいかな、この国に着くとすぐ、わしは小さな町に任命されました。ええ、小さな町でしたが、農事にはいっしょうけんめいでしたな。その時にはまだタガログ語がよくわかるというほどではなかったが、それでも女どもの告解も聞いたし、おたがいに意志は通じました。ところで三年後には、みんなわしを慕うようになりましてな。三年後、土人の司祭が死んで、無住になったそこより大きい町へわしが移るときなど、みんな泣きだすやら、贈り物は山のように持って来るやら、楽隊つきでわしにゾロゾロついてくるという……」

「でもそれはただ……」

「まあ、まあ、お待ちなされ！　そうせいてはいかんのじゃ！　わしのあとをついだ司祭は、わしより長くはそこ

にいつかなかったが、しかも出て行くときには、わし以上の人数が後に従い、涙も楽隊もわし以上じゃった。しかもこの男は、わしよりもひどく人々をぶんなぐり、それでこの教区のお布施を二倍近くにあげたというのに。」

「が、ちょっとお待ちくだ！」

「まだ、まだ。わしはサン・ディエゴの町に二十年いて、やっと数か月前にそこを…離れて来ました（ト、ここは無念そうな顔付で）。二十年、これがひとつの町を知るのに十分でないとはだれも言えますまいな。サン・ディエゴには六千の住人がいて、その一人一人を、まるでわしが産んで育てたほど、よく知っていたもんですて。この男はどっちの足がびっこなのか、あの男のくつのどこが足にあたっているのか、だれがどのむすめっ子に恋をしたか、この女がどの男とまちがいをしでかしたか、だれがこどものほんとうの父親なのか、わしがやつらみんなの告解を聞いたのだからな。そしてみんなが義務を怠るようなことはなかったからな。わしがうそを言っているかどうか、この家の主人のサンチャゴが話してくれるじゃろう。かれはそこに土地をどっさり持っていて、そこでわしらの友情が結ばれたのだから。どうじゃな、土人がどんなものか、おわかりでしょう。わしがそこを去るときには、わしのあとについて来たのは、ばあさんが二、三人と、なん人かの聖第三会*の信士だけじゃった。これが二十年もいたあとにじゃ！」

「でも、それがタバコの専売廃止と関係があるとは思えませんね！」と金髪の男は、フランシスコ会修道士がシェリー酒の小さなグラスをとりあげたすきにつけこんで、答えた。

ダーマソ師はひどくびっくりして、すんでのことでグラスをとり落とすところだった。かれはしばらくじっと、若者の顔を見ていたが、やがて「なに、なんじゃと？」ともっとおどろいた様子で言った。「だがしかし、この光のように明らかなことが、あんたにわからんという法があるじゃろうかのう？　すべては大臣がたの改革が不条理*だということの証拠だということが、神のみ子である貴下におわかりにならんのかのう？」

こんどは、とまどったのは金髪だった。中尉はまゆねのしわをさらに深め、背の低い男はダーマソ師のいうことを認めるかのように、あるいは否定するかのように、頭をふった。ドミニコ会修道士は人々に背を向けただけだった。

「あなたはそうお信じに……」若者はひどく真剣な、そして好奇心をいっぱいにあらわした顔で、修道会士を見つめながら、やっとたずねた。

「信じるかって？　福音書を信じるのと同じことじゃ！土人はこのとおり怠け者なのじゃ！」

「ああ！　口をはさんで失礼ですが」と若者は声をひくめ、自分のいすをちょっと近よせながら言った。「あなたはわたしの興味をいたくよび起こすひとつのことばをおっしゃいました。その怠惰というものは、ほんとうにうまれ

つき土人の中にあるものなのですか、あるいはまた、ある外国人の旅行者が言ったように、その怠惰* ということを、われわれ自身が自分たちの怠惰、立ちおくれ、そして植民地体制の言いわけに使っているというのが事実なのでしょうか？　この旅行者は、同じ人種の住んでいるほかの植民地についても語っていますが…」

「とんでもない！　それはねたみじゃ！　やはりこの国をよくご存知のラルーハ氏にもきいてごらんなさるがいい。ここの土人の無知と怠惰に肩をならべるものがあるかどうか、きいてみなさるがいい！」

「いや、まったくです。」と、ここで名ざされた背の低い男が答えた。「この世界中のどこにだって、ここの土人ほどの怠惰をみつけることはできっこありませんよ。世界中のどこにだって！」

「これ以上の悪習、これ以上の思知らずは、ありゃしない！」

「これほどのしつけの悪さもありゃしない！」

金髪の若者は心配そうにあたりを見回しはじめた。そして、

「みなさん、わたしたちは土人の家にいると思うんですが。あのお嬢さんがたも……」と低い声で言った。

「いやいや、そんなにビクビクなさることはありません。サンチャゴは自分じゃ土人のつもりじゃないんだし、それにここにはいませんやね、まあ……よしんばいたにしたってさ！　それが新しく来た人たちの愚にもつかぬ考えじゃ。まあ、なんか月か暮してごらんなさい。たくさんのフィエスタやバイルーハン［おどり］にいつも顔を出し、カトレ［おりたたみベッド］の上にねて、たっぷりティノーラを食べてるうちにゃ、きっと考えが変りましょうて。」

「あなたがティノーラとおっしゃるのは、一種のはすの実で、人を……あの……わすれっぽくするという、あれではありませんか？」

「はす［ロト］でも富くじ［ロテリーア］でもありませんよ。」とダーマソ師が笑いながら答えた。「まるっきり見当ちがいじゃ。ティノーラというのは、鶏とかぼちゃの煮込みですて。ここへお着きになっていく日におなりだな？」

「四日です。」若者はいささかムッとして答えた。

「人に雇われておいでなすったのかな？」

「いいえ、この国を知ろうと思って自腹でまいりました。」

「いや、これはこれは、何とめずらしいお方じゃ！」ダーマソ師はいかにもめずらしそうにかれを見つめながら叫んだ。「自腹で来なすったと、しかも愚にもつかんことのために！　いやはや奇怪しごく！　あんなにたくさん本があるのに。しかもちょっとした常識だけで……おおぜいの人があんなに大きな本を書いているのに！　ちょっとした常識の持ちあわせだけで……」

「ダーマソ神父どの、あなたはさきほどおっしゃいましたなあ。」ドミニコ会修道士が、突然話の腰を折って口を

出した。「サン・ディエゴの町に二十年いらっしゃって、そこを出て来た、と……師はその町にご満足ではあられませんでしたか？」

ダーマソ師は、なにげなく、むしろなげやりのような調子でこうきかれると、快活な様子をいっぺんになくし、笑いを消した。そしてそっけなく、

「いや！」とつぶやくと、ひじ掛けいすの背にあらあらしくからだをぶつけた。

ドミニコ会修道士は、まえよりいっそうなにげない調子でことばをつづけた。

「二十年もおられて、自分が着ている着物のようによくご存知の町を離れるのは、さぞかしつらいことだったでしょうな。わたしだってそりゃあ、カミリンを離れるときには悲しい思いをしましたよ。なんか月もいなかったのですがね……もっとも土の人たちは会のためにそういう処置をしたんだし……わたしのためにもよかったんですが。」

ダーマソ師は、今夜はじめて考えこんだ様子をした。突然かれは自分の座っているいすのひじ掛けにげんこつをひとつくらわせ、あらあらしく息を吸いこんでから、叫んだ。

「宗教が存在するかしないか、それはすなわち僧職者が自由であるか自由でないかということだ！　この国はほろびる、もうほろびつつあるのだ！」

そうして、もう一度げんこつをくらわせた。

広間にいた人たちはみんなびっくりして、このグループに顔を向けた。ドミニコ会修道士は、目がねの下からかれを見ようとするかのように頭をもちあげた。例の散歩をしていたふたりの外国人も、一瞬立ちどまり、おたがいに顔を見あわせ、犬歯をちょっと見せあってから、また散歩の運動をつづけた。

「あの人は、きみが尊い神父さま扱いをしなかったから、ごきげんをそこねたんだぜ。」とラルーハ氏が、金髪の若者の耳に口をよせて、ささやいた。

「神父はいったい何をおっしゃりたいんです？　いったいどうしたというんです？」ドミニコ会修道士と中尉とが、それぞれ調子のちがう声できいた。

「これがもとで、かくも多くの災いが起こるのじゃ！　為政者は神のお使いにそむいて、異端者どもの肩を持ちよる！」フランシスコ会士はいかにも強そうなげんこつをふりあげて、ことばをつづけた。

「いったいどういう意味なんですか？」まゆねにしわをよせた中尉は、なかば腰をあげながら、もう一度きいた。

「どういう意味だと？」フランシスコ会士は中尉に面と向かうと、いっそう声をはりあげてそのことばをくりかえした。「わしは言いたいことを言うだけじゃ！　わしは、わしの言いたいことはだ、司祭が自分の墓地から異端者の死体を追放したら、なんびとといえども、王といえどもそれに干渉する権利はない、ましてや罰を加えたりする権利などありはせぬ、ということじゃ。総督めがなんじゃ、総

督めが……わざわい小総督め*が！」

「神父よ、閣下は教権執行者の代理者*でござるぞ！」軍人が立ちあがりながらどなった。

「閣下がなんだ、教権代理人がなんだ！」とフランシスコ会修道士が、これも立ちあがりながらどなりかえした。「世が世なら階段をひきずりおろされていようものを、むかし不信仰のブスタメンテ総督に修道会の人たちがくらわせたようにな。当時は信仰の世の中だったわい！」

「ご注意申しあげるが、わしは許しませんぞ…総督閣下は王陛下の代理者なのですぞ！」

「王［レイ］がなんだ、塔［ロケ*］がなんだ！　われらにとっては法にかなわにゃ、王もなにも…」

「ダマレッ！」と中尉は兵隊を指揮でもするように、いたけだかにどなった。「貴公が今まで言ったことを取消すか、そうでなければ明日にでもすぐ、閣下にご報告しますぞ！」

「行きなされ、今すぐにでも、さあ行かっしゃい！」ダーマソ師はげんこつを握りしめて中尉に近づきながら、ばかにしたような態度で答えた。「わしが僧服を着ているからといって、わしにできないと……さあ行きなされ、それとも馬車ぐらい、貸して進ぜようかの！」

けんかの風向が喜劇のほうに変ってきた。そのときちょうどぐあいよく、ドミニコ会士がなかにはいった。

「あなたがた！」とかれは権威を持った調子で、しかも修道会士にまことに似つかわしい鼻声で言った。「事をこんがらがらせたり、罪とがのない所からそれをほじくり出そうとなさってはいけませぬ。わたしたちは、ダーマソ師のおっしゃったことを、人間としてのことばと、司祭としてのことばとに区別しなければなりませぬ。司祭としてのことばは、その性質上、per se［おのずから］罪を犯すということはありえませぬ。それは絶対的真理から発しているからであります。人間としてのことばについては、さらに小区別をしなければなりませぬ。神父がab irato［怒りから］発しておっしゃること、ex ore［けじめを越えて］しかしin corde［心のなか］でなくおっしゃること、それからin corde［心のなか］でおっしゃることであります。この最後のものが罪をおかすことのある唯一のものでありますが、それもそれがin mente［頭のなか］にすでにひとつの動機として存在しておったか、または単に話が熱をおびてきたためにper accidens［偶発的に］出て来たか、ということによるのでありまして、かりにそれが……」

「さればシビーラ神父どの、わたしはper accidens［偶発的に］言いましたので、そしてper mi［わたしとしては］その動機を知っているのであります。」軍人はこのおびただしい区分のためにわけがわからなくなって、これ以上これを続けられたら、自分までも罪人にされかねないという気がしてきたので、こう言ってかれの話の腰を折った

「わたしにはその動機も、師がそれについて区分をなさろ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.